

第102回日本エスぺラント大会

10月12日 仙台市民会館

エロシエンコと魯迅

藤井省三

東京大学文学部教授

魯迅ほか訳エロシエンコ童話集

上海商務印書館、1922-7第1版、1933-10改訂
版(?)第1版、1950-07 第5版8元→



エロシエンコ (1890-1952) 魯迅(1881-1936)年表

1890-1-12 南ロシア・クールスク県アブーフカ村で出生

1899? モスクワ盲学校入学 1908 モスクワ盲学校卒業

1902-09魯迅、日本留学(仙台医専ほか)、1909年中国に帰国

1912-1 ロンドン王立盲学校に留学、秋、帰国、日本語学習開始。

1912-5魯迅、北京・教育部(文科省)へ移動。

1914-4-27 東京着 9月東京盲学校入学

1916～19-6東南アジア放浪、インド追放 (1917ロシア革命)

1918～1922魯迅「狂人日記」「孔乙己」「故郷」「阿Q正伝」

1919-7 日本帰還、社会主義運動への接近、日本語童話「鷺の心」等創作

1921-4 暁民会文芸講演会「禍の杯」5-1 第2回メーデーで検束

-5-28 退去処分発令「帝国ノ安寧秩序ヲ害スル虞アリ」

-10-1ウラジオストックからシベリア放浪後、上海・実費治療院へ

1922-2北京魯迅邸着、北京大学世界語専任講師、7-10月フィンランドへ

1922～23魯迅「端午の節季」「あひるの喜劇」「呐喊(とっかん)自序」執筆、エロシエンコ童話「時のお爺さん」「エロシエンコ童話集』『桃色の雲』中国語訳

1923-4 エロシエンコ、北京よりロシア帰国

北京の魯迅は読売新聞を郵便講読

単に露人との理由で
／盲詩人エロシエン
コ氏に／物々しい退
去命令

警官泥靴の儘二階
に上り／否応なしに
引致／エ氏を蹴るや
ら殴るやら

危険思想を／宣伝す
る／盲人で気の毒
だったが／断然たる
処置をした／川村前
局長談

1921-5-29読売新聞→

単に露人との理由で

盲詩人エロシエンコ氏に

物々しい退去命令

昨日床次内相から發せられて
近日中に愈よ杖を力に外國へ

既報、其後から露人であるとの
故に常に眼に眼に労働禁や社會
主義同盟の大會に参加の一人とし
て参加してすら檢束取調をうけ再
三退去を命ぜられるとまで傳へら
れた、其の露人自詩人エロシエン
コ氏は、昨日床次内相大臣の手
から退去命令が發せられ一紙書
出で退去命令を受けた事がある

警官泥靴の儘二階に上り

否応なしに引致

エ氏を蹴るやら殴るやら
戸障子を滅茶々々に破壊

エロシエンコ氏は廿八日午後六時
頃散歩先から帰宅ししが同もなく
夜間窓から刑事が四名来て着に用
行を求めたがエ氏は之を拒絶した
スルト刑房は退去命令が發せられ

許に來てゐるので本人を連れて來
いと命じられたからだと云つた中
村屋の主人相馬氏はそれなら明日
(二十九日)の發令待つて呉れと云
つて、エ氏を距か午正七時頃刑房を

慶軍無慘

十一對二で
敗因は慶

米州大野戰隊一團は廿
八日午後三時三田球場で市團(球)
池田(球)氏對加軍先攻で勝利
した、久方振りの外人隊との試合
で天氣はよしフワンは三田山下に
四千と集まつた三越音楽隊は盛に
演奏して觀衆を惹ける拍手喝采
にベル米團代大使の始球式に
いて開戦した加軍は第二回目に一
擊大敗を入れ更に五球を加へたる
に反し慶軍は辛じて二點を奪たる
のみで結局十一對二で加軍大勝す

経過

第一回加軍マイ
イス右翼飛球アリブ
三田デリー・メイキン
一塁線上に二塁打を
無しロー連三回の安打に似いたが
ダイバウー一掃ゴロに墜れて得點なし
▲慶軍側は高熱三回の投球須臾
一球を中堅を破つて二塁打とした
三田三塁す
◇が二回 加軍スミス中堅を越し
三塁打を打ちエーチ・メイキン
ゴロ・トムプソルの二塁にゴロを
り高須本塁に送球したが同時に合は
スミス生還すモロ一連三回の安打

エロシエンコに対する魯迅の希望と失望

童話集『夜明け前の歌』1921ほかを魯迅ほか中国語訳1922「狭い籠(せまい檻)」等



エロシエンコ童話劇
『桃色の雲』

魯迅による中国語訳
(1923)



雲 的 色 桃

譯 迅 魯 作 珂 先 羅 愛

魯迅はなぜエロシエンコを訳したのか 希望の論理

1907「**摩羅詩力説**」末尾の**コロレンコ**(1853-1921)「**最後の光**」シベリアの冬の闇の中で、老人が読書する少年に「鶯とは桜の木に止まって、首を伸ばして美しい声で鳴く」と教える一場。

1921「**故郷**」: 希望とは本来あるとも言えないし、ないとも言えない……

1922-12「**『呐喊』自序**」: 希望は将来にあるのだから、私の必無の悟りでは、彼のあり得るという説を決して説得できず……

1925-1-1「**『野草』「希望」**」「**絶望の虚妄なることは、まさに希望に相同じい**」

魯迅：詩人演者のイメージと復讐のテーマ

1907「摩羅詩力説」

バイロン等ロマン派文学論

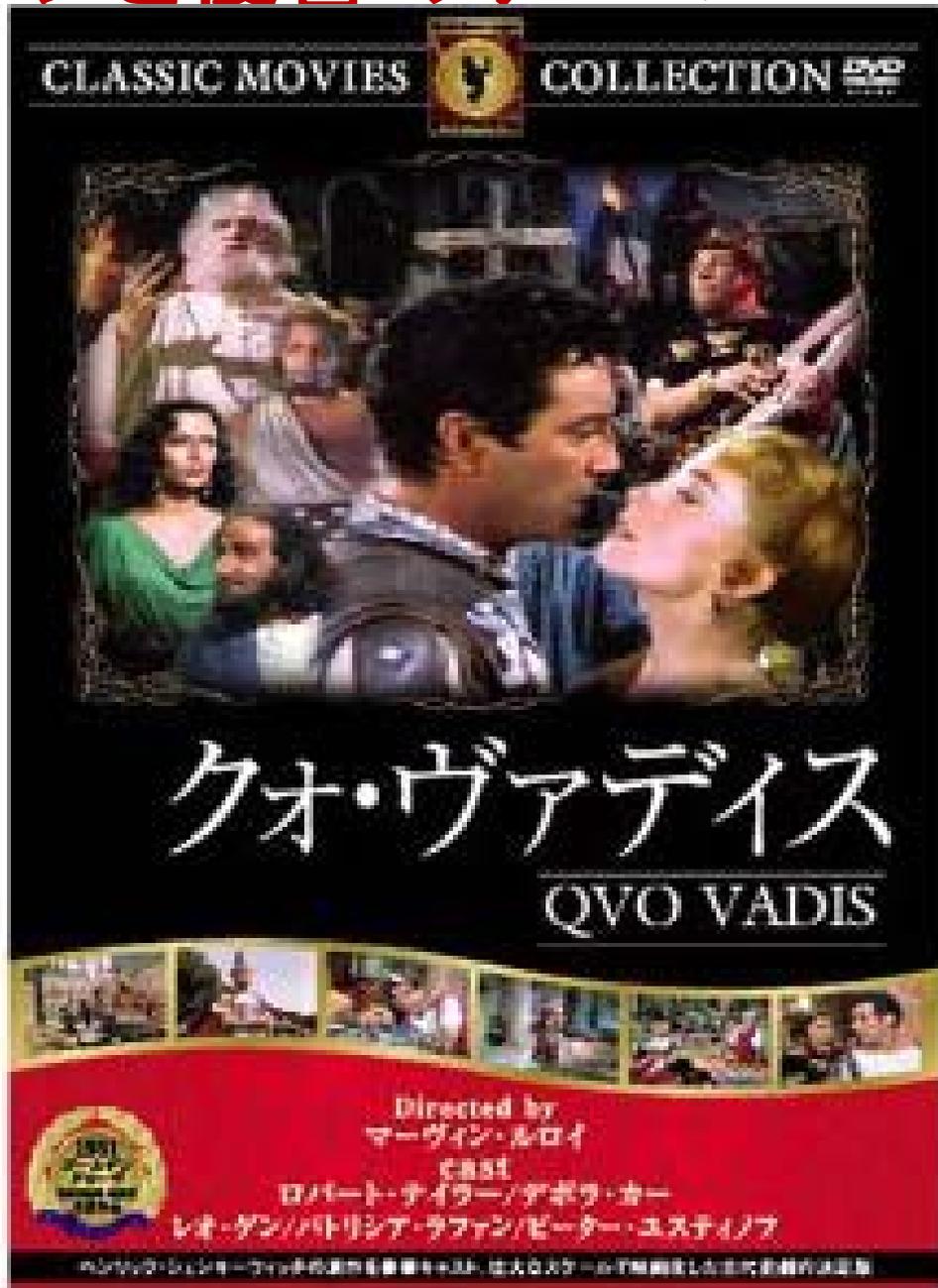
詩人＝民衆の前で死闘する剣闘士

シェンキエビチ『クオ・ヴァデイス』(1896)

古代ローマのコロセウムで、主人リギア姫の為に猛牛と格闘する勇士ウルスス

興奮した市民観衆が暴帝ネロにリギア姫を釈放させる

マービン・ルロイ監督1951『クオヴァデイス』→



ペテーフイ

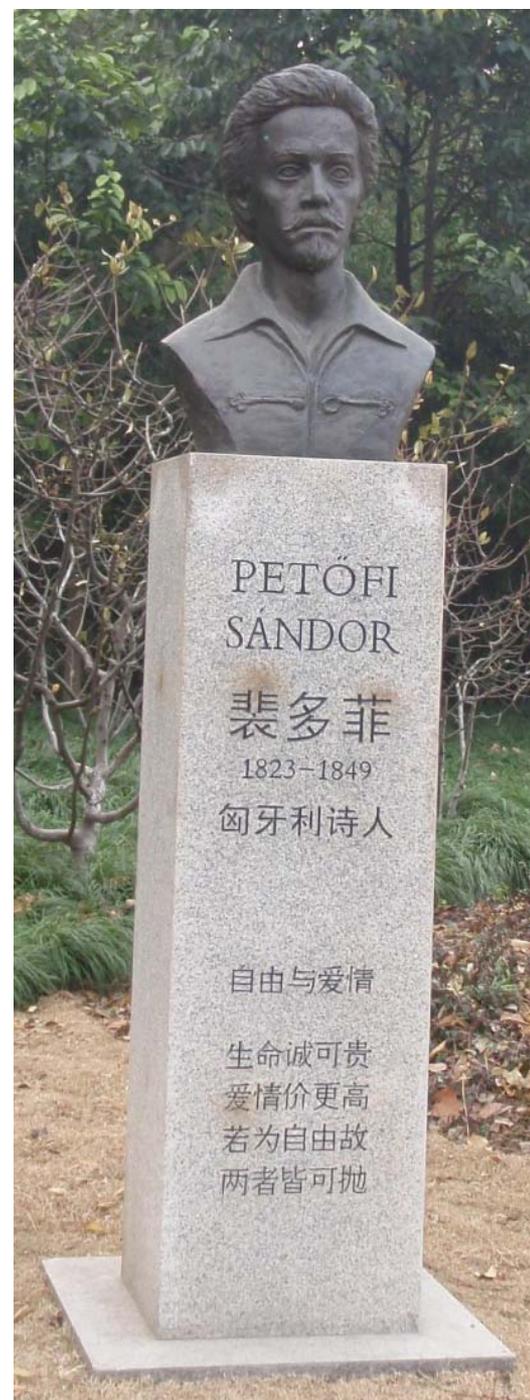
ハンガリーの革命的国民詩人。自由と愛を歌った。国民革命戦争に加わり若くして戦死。長編叙事詩「英雄ヤーノシュ」ほか。(1823~1849)

中国では専制君主が詩を制限するばかりでなく、民衆が詩人を嫌って殺してしまう。

絶望の虚妄なることは、まさに希望と相同じい。魯迅

(散文詩集『野草』「希望」1925-1-1作)

ハンガリー詩人ペテーフイ
(1823-49、上海魯迅紀念館)→



ワッツ画“Hope”

目隠しをした

金髪女性詩人像

G・F・ワッツ(1817-1904)

“Hope”(希望、1886製作)

「希望は期待にあらず、
寧ろ僅かに残れる一弦より
来る楽の音を想はしむ」

漱石・中里介山らが注目
孤独な詩人

1907魯迅企画文芸誌

『新生』表紙絵



單に露路人との理由で

盲詩人エロシエンコ氏に

物々しい退去命令

昨日床次内相から發せられて

近日中に愈よ杖を力に外國へ

既報、其故から露國人であるとの
 故で常に露人に勞働禁や社會
 主義同盟の大會に参加の一人とし
 て参加してすら檢査取締をうけ刑
 三罰を命ぜられるとまで傳へら
 れた、露の盲詩人エロシエン
 コ氏は、昨日床次内相大蔵の手
 から退去命令が發せられ一切露地

は直に露地獄に墜ちられて今更こそ
 は同氏も氣の毒傳ら官廳監視の下
 に十数年住みなれた日本を二階
 中に去らねばならなくなつた氏は
 嘗て印度に在つた際も官廳の爲め
 に無罪釋放の傾向があるとの理
 由で退去命令を受けた事がある

警官泥靴の儘一二階に上り

否應なしに引致

エ氏を蹴るやら殴るやら

戸障子を滅茶々々に破壊

エロシエンコ氏は廿八日午後六時
 頃徒歩先から歸宅しをが間もなく
 夜橋通から警察が匿名來て署に同
 行を求めたがエ氏は之を拒絶した
 エルト君は退去命令が書付の手

許に來てゐるので本人を連れて來
 いと命じられたからだと云つた中
 村の主人相馬氏はそれなら明日
 (二十九日)の庭を待つて呉れと云
 つて、エ氏を引致した事がある

ギターを弾くエロシenko

『夜明け前の歌』口絵

(1921、白黒写真)



「希望の詩人」の顕現

中村彝「エロシェンコ
氏の像」(1920)

『夜明け前の歌』に
カラー写真で収録

カール・ヨネダ(米田
剛三)の北京のエロ
シェンコ回想



エロシエンコ童話集
『夜明け前の歌』の
グラビア二点

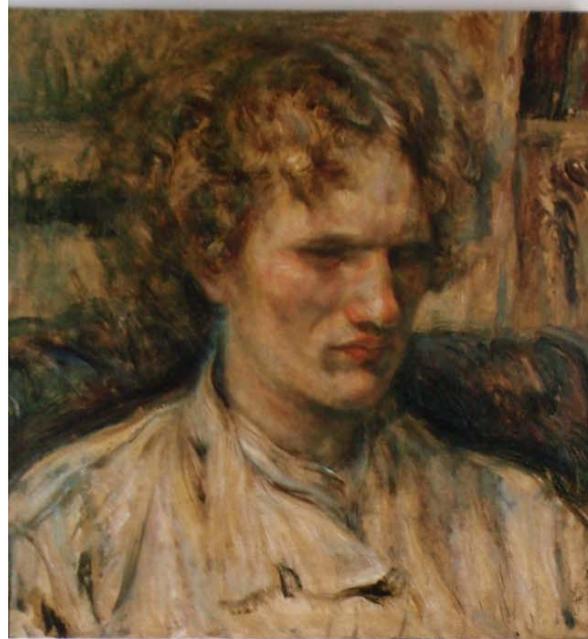
中村彝画「エロシエン
コ氏の像」

+

ギターを弾くエロシエ
ンコの写真

= ワッツ画“Hope”

= 魯迅詩人像

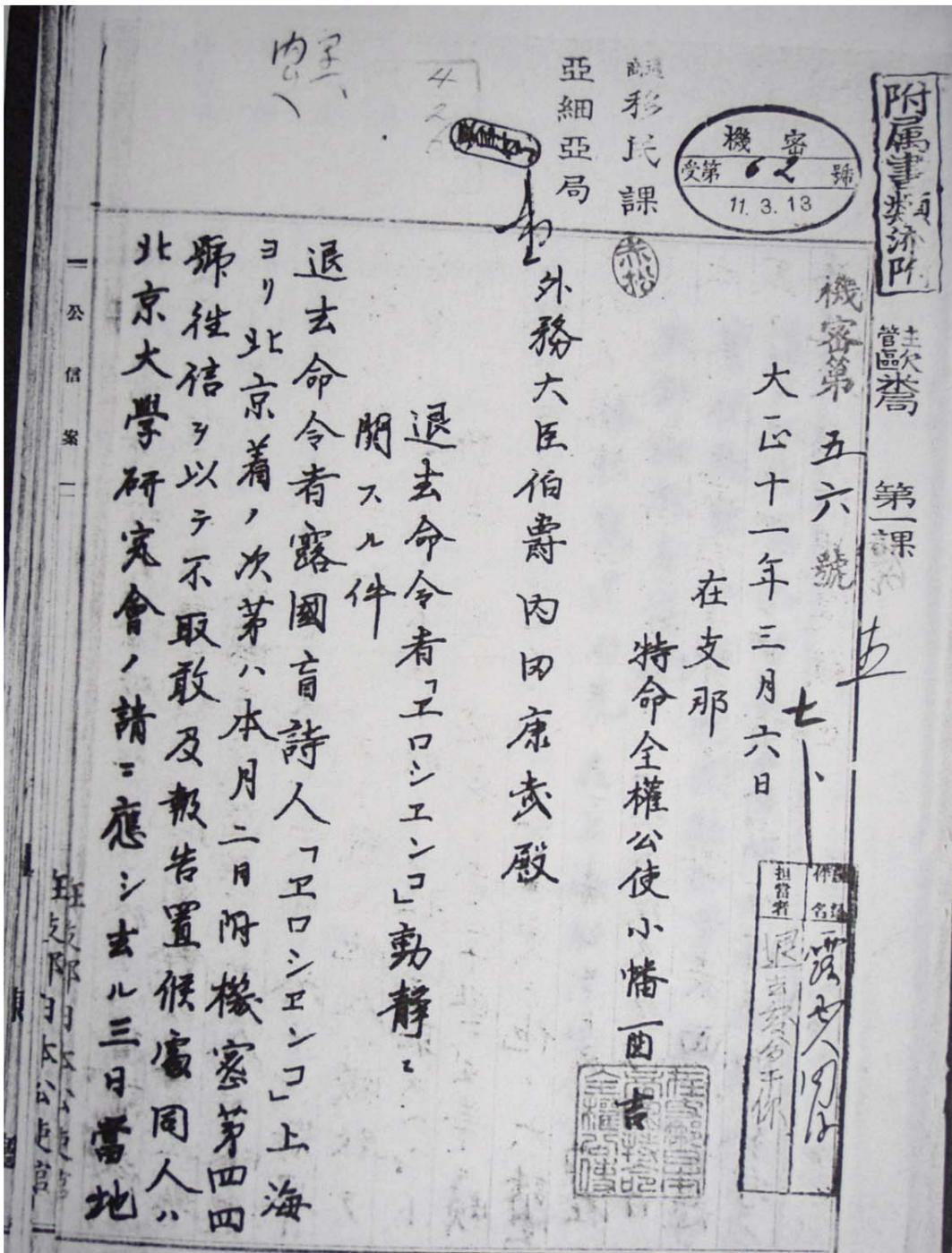


北京のエロシエンコ 「解放の預言者」の 没落

北京大学では当初は大歓迎

やがて共産党系学生による講義ボイコットか? アナーキスト系学生三名のみが残る。

1922-3-13「退去命令者「エロシエンコ」動静ニ関スル件」
北京公使より外相への報告(外交史料館)→



北京大、中共派 ボイコットによる 詩人の没落

1923-6

エロシenko
最後の童話
「愛という字の傷」

「復讐」の論理

(藤井『魯迅——東
アジアを生きる文学』
岩波新書を参照)

1922-5-23

北京世界語会→



あひるの喜劇（鴨的喜劇） 1922-11

舞台となった北京・八道湾の魯迅邸は約五〇〇坪の敷地に建てられた伝統的な四合院（しごういん）形式の家。ここに魯迅の母である魯瑞、魯迅の妻朱安、魯迅の弟である周作人、周建人兄弟とその日本人妻羽太信子（はぶとのぶこ）、芳子姉妹、二組の弟夫婦の五人の子供たち、それに使用人たちが住んでいた（但し周建人は上海に単身赴任中）。典型的な中国の大家族であった。

こんな小さな世界でも「予言者」は自給自足の暮らしを説き、周作人夫人たちに向かい中庭に白菜を植えよ、蜜蜂を飼え、鶏を豚を牛をラクダを飼いなさい（！）、と勧めていた。そんな彼が北京の寂寞から逃れようとしておたまじゃくしとあひるの雛を飼いはじめたものの、予期せぬ結果に終わってしまう。

「寂しい、寂しい、砂漠にいるように寂しい」 北京・四合院の寂寞→「『呐喊』自序」の絶望 と希望

『北京風俗図譜』居宅全図↓



1921訪燕の芥川龍之介

「誰だ、この森林を都会だなどと言ふのは？」『全集』第12巻「雑信一束」

私が支那を南から北を旅行して廻つた中で北京程気に入つた処はありません。それが為に約一ヶ月間も滞在しましたが実に居心地の好い土地でした。城壁へ上つて見ると幾個もの城門が青々とした白楊やアカシアの街路の中へ段々と織り出されたやうに見えます。処々にネムの花が咲いて居るのも好いものですが殊に城外の広野を駱駝が走つて居る有様などは何んとも言へない感が湧いて来ます。

天津『日華公論』1921年8月号

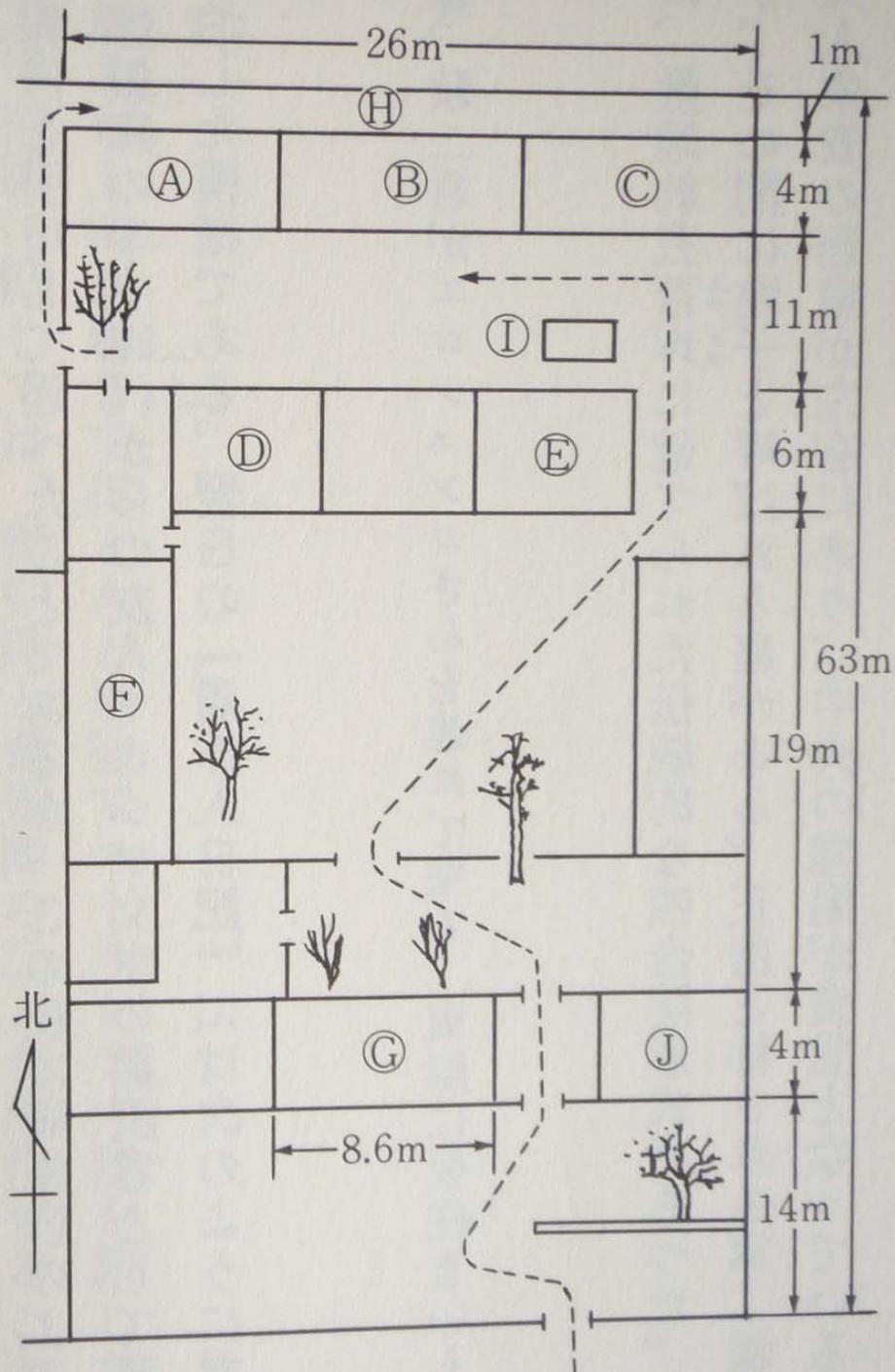
筑摩書房『芥川龍之介全集』第6巻一



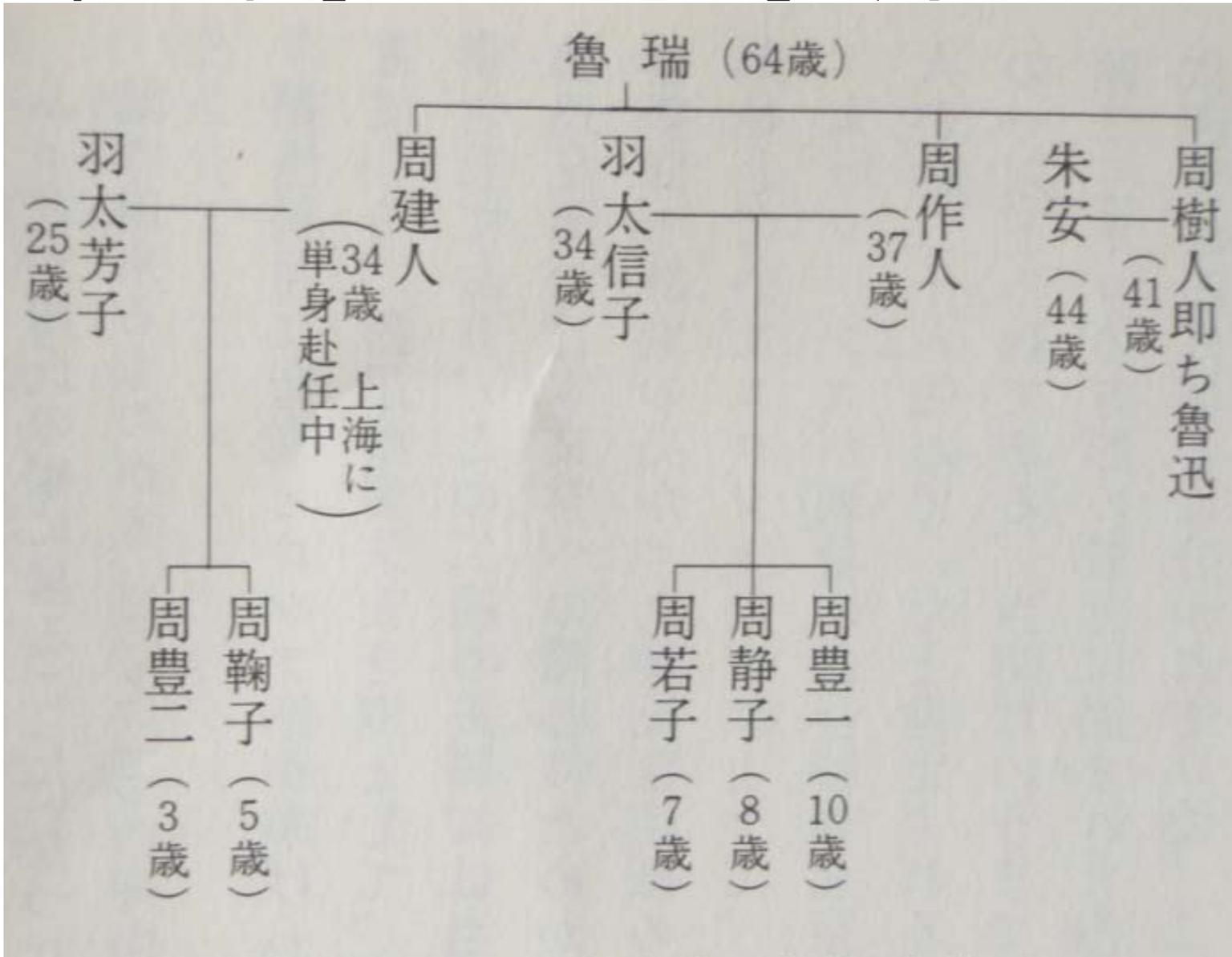
あひるの喜劇の魯迅邸

北京八道湾周家見取り図 敷地は約500坪
『魯迅研究資料』第8集（天津人民出版社、
1981）および『颯風』第14号（京都・朋友
書店取扱い1982）による

- ① 周作人一家の居室
- ② 羽太芳子一家の居室
- ③ 客室、エロシェンコの居室
- ④ 魯瑞の居室
- ⑤ 朱安の居室
- ⑥ 魯迅の居室
- ⑦ 応接間兼魯迅の書齋
- ⑧ 兎を飼育した“小院子”
- ⑨ あひるを飼育した“小池”
- ⑩ カール・ヨネダが滞在した部屋



魯迅邸の「僕」と「エロさん」と周家の人々



北京・八道湾周家の人々。()内は当時の年齢。

井伏鱒二(1898-1993)の激賞

……余韻の残るいい感じの小説である。私も人なみに魯迅の作品には尊敬の念を持つてゐるが、その作品を読むやうになつたのは、まだ魯迅のことを知らなかつたとき「家鴨〔あひる〕」を本屋の店頭で見たのがきっかけである。何気なく本の頁をめくつてゐるとエロシエンコといふ名が見つかった。それに興味を持つて立ち読みしてゐるうちに、その作品全体が好きになつてその本を買つて来た。
(『点滴』要書房1953)

端午の節季(端午節) 1922-9

主人公方玄綽は官僚であり北京の首善学校の教員を兼任している。かつては社会の不合理に対し旺盛な批判精神を持っていた方も、「学生団体が始めたいろいろな事業にしても、もう弊害が出て、線香花火のように消えてしまう」のを見るにつけ近ごろでは「古今、人、相遠からず」と考え、「似たようなもの」が口癖となっている。軍閥政府が予算を流用するため、教育費が払底、教員の俸給が半年以上も遅配になり生活は苦しいが、さりとして妙なプライドがあり教員デモに積極参加するわけでもない。それでも國務院のある中南海の正門である新華門に教員たちが押しかけ、門前のぬかるみで警護兵にさんざん殴られた結果、少し給料が出ると、方もちゃっかり頂戴する。

役所でも給料の遅配が始まり、出入りの商店のつけは溜まるいっぽう。やがて端午節がめぐってきた。当時の中国では旧暦で端午(五月五日)、中秋(八月一五日)、そして大晦日の三回が掛け売りや借金の決済日であった。それにもかかわらず給料は支払われず、銀行の三日間の休日明けに行う会計課との再交渉待ち。親戚友人からは借金を断られてしまった。出版社や新聞社も雀の涙ほどのわずかな原稿料さえろくに払ってくれない。明日、決済にやってくる商人に何と釈明すればいいの、節季を越せたにしてもそのあとはどうするの、と心配する妻は、とうとう宝くじを買ったらと言い出して方先生から「ばかな、なんて無教養な」と叱られてしまう。ところが方玄綽自身、実は五〇元の借金を断られた帰り道、菓子舗の一等何万元という福引きの看板に心を動かされていたのだ。手を出さなかったのは、六〇銭の菓子代が惜しかったから。そこで方先生はやけになってボーイに北京の銘酒「蓮花白」を買いに走らせ(もちろんつけで)、ほろ酔い加減でタバコを吸いながら胡適の詩集『嘗試集』をアーウーと読み上げるのであった。

18「端午の節季」2002趙延年『画説魯迅』福州・福建教育出版社→



端午の節季

・魯迅1922-12「『呐喊』自序」 「私も若いときには多くの夢を見たことがあるが、後にはあらかた忘れてしまった。だが自分でもさほど惜しいとは思わない。思い出というものは、人を楽しくするものであるが、時には人を淋しく感じさせるものであり、精神の糸を過ぎ去ってしまった寂寞の時間になおつないでおいたとしても、何の意味があろうか。それなのに、私は全て忘れられぬのがひどく苦しく、この忘れ去ることのできなかつた一部分が、今になって『呐喊』の来歴となったのだ。」

・目覚めの苦しみ：エ氏「世界の火災」 「眠つてみられるものは倖〔しあわせ〕だつて？ 倖でせう、狭い籠〔かご〕の中に這入つて居〔い〕ても、自由の夢は見られるし、夜がどんなに寒くつて淋しくつても、美しい暖い春の夢は見られるんだもの……併〔ただ〕し、坊ちゃん、こんな夜、一度眠〔ねむり〕から覚めたものは、もう二度と眠る事が出来ないんですよ。坊ちゃん。阿片を呑まなければ、モルヒネを注射しなければ、二度とは眠られないんだよ、一度目を覚ましたものは……

・「『呐喊』自序」 「仮に鉄の部屋があつてこれは全く窓もなく絶対に破壊できぬもので、中にはたくさんの人が熟睡しており、まもなく皆窒息死してしまうわけだが、熟睡したまま死んでいくのだから、決してもうじきに死ぬという悲哀は感じない。今君が大声をあげて、やや意識のはっきりしている数名を目覚めさせたら、この不幸な少数の者に救いようのない臨終の苦痛を受けさせることになるが、君はそれでも彼らに申し訳がたつと思うかい。」

現在の中国におけるエロシエンコ童話

魯迅訳

『エロシエンコ童話・
ロシア童話集』

ハルピン出版社

2015-4、22元→



世界十大經典童話

愛羅先珂童話集

魯迅訳

吉林文史出版社2006-3
、5000冊、380元

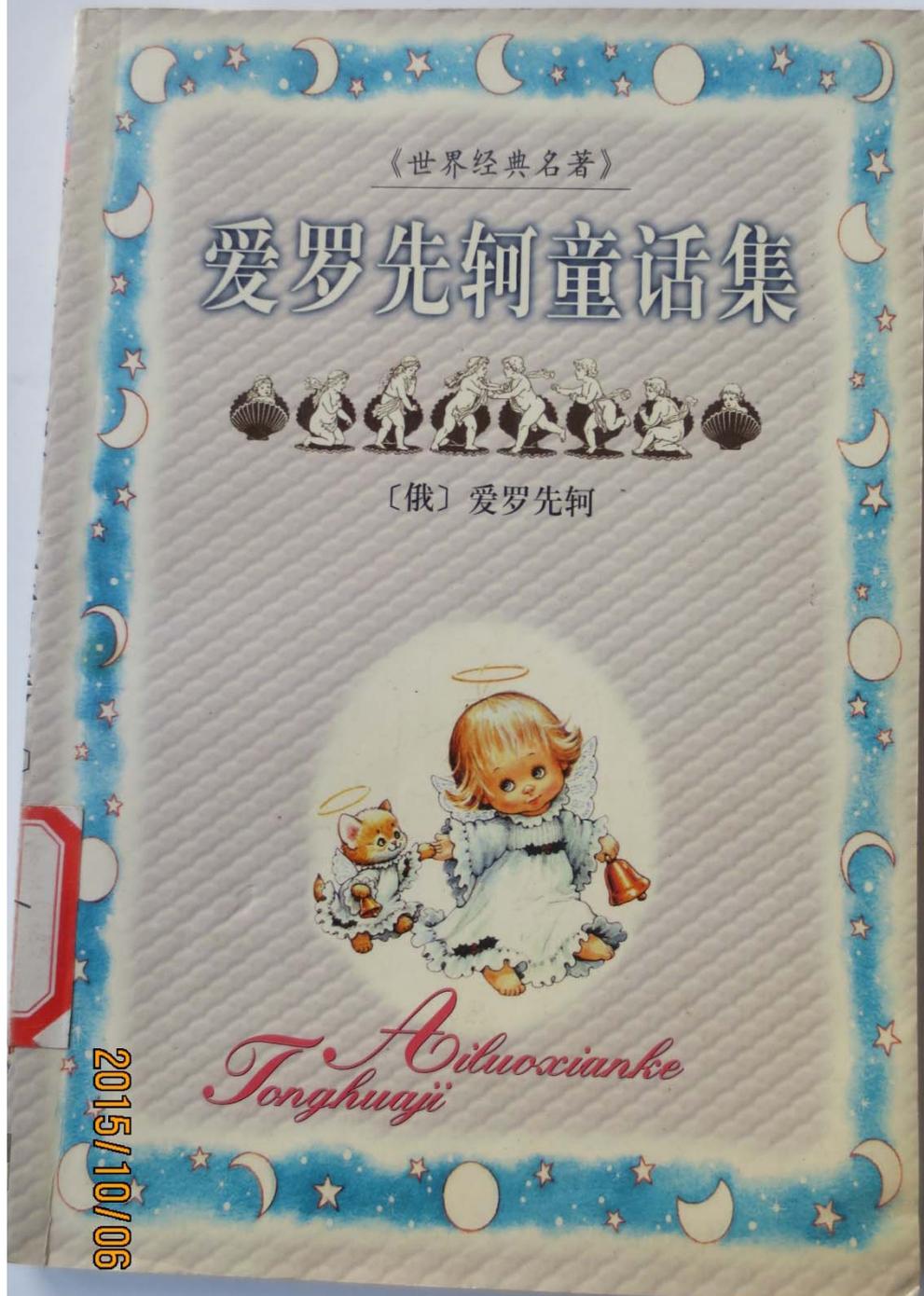


愛羅先珂童話集

魯迅訊

新疆青少年出版社

刊年不明



エロシエンコ作「時のお爺さん」

『人類の爲めに』(東京刊行社、1924-10)収録

大きな賑かな北京があるに違ひない。けれども僕の北京は、小さい静かな北京だ。偉い立派な人々の住む北京があるに相違ない。けれども僕の北京に住む人々は、質素な静かな、真面目な人達ばかりです。

〔中略〕夜になると、僕は殊に寂しい。夜は何時も独り居るから、床に入つて僕は何か夢でも見て、早く眠らうと努力してゐるけれど、僕の北京はよく眠つてゐる癖に、よく眠られるところではない。

僕の北京は美しい夢を見るところではなく、何時か前に見た夢すら忘れさせるところだ。〔中略〕

この間僕は非常に淋しかった。皆さんの知つてゐる通り、僕は人類が大体自由や平等や同胞主義、正義に向つて進んでゐると信じてゐる。この不幸な世界は弱い者や貧乏人を虐める利己主義者の圧迫から逃れて、全人類を愛し全人類の幸福を要求する主義達の天下になることを望んでゐる。そのことを昼も夜も待つて、祈つてゐるのです。しかし若い人々は年寄の真似をして、自分の親や祖父さんのした間違や罪悪を何度も何度も繰返して、俺達も人間だといぱつて歩いてゐるのを見ると、僕は人類の進歩してゐることを疑ふのだ。そればかりでなく、個人の生活に於いても家庭に於いても、また社会に於いても、政治に於いても、年寄の間違や罪悪を繰返へす若い者達を見て、僕はこの幸福な人類が何千年も続いて、難儀して、結局に退化しなければならないのではないかと心配するのだ。それを考へる時、僕は一番淋しい。この丁度そういふ時のことだつた。まあ、こん度こそ若い人々は親や祖父さん達の間違を直して年寄の人類に対する所有〔あらゆる〕罪悪を贖つて、何の妨もなしに幸福の時代に自由に進むに違ひないと自分を慰め乍ら床に入つた。人類のことを考へるのは苦しいから、時計を採つて今度こそかちかち鳴る音の中に金持や野心家やあらゆる罪人の圧迫から人類を救出す友達の声が聞こえるだらう、と時計を自分の傍〔そば〕に置いた。しかし友達の声のかはりに、二三分も経たぬ裡に厳しい時のお爺さんのぶつ／＼僕を叱る声が聞こえて来た。

時のお爺さんは、次のように話し始めた……

『人間は馬鹿だ、カチカチ……カチカチ…… / 今になつて馬鹿になつたのではなく、何時もそうだつた。……昔も、……今も、……後〔のち〕も……カチカチ……カチカチ……。 / 人間は利巧になりませんよ、成る筈がない。カチカチ……カチカチ…… / 馬鹿は馬鹿を産んで、其馬鹿は自分より一層馬鹿を産むのだ。カチカチ……カチカチ…… / それが人類の発達だ、羨しいだらう？ お黙り……カチカチ……カチカチ…… / 可哀想だといひたいだらう？ 可哀そうなことがあるものか！ カチカチ……カチカチ…… / 外から馬鹿にされたのではなく、自分が自分を馬鹿にするんだから、カチカチ……何が可哀想だ？ ……カチカチ……

今日の参考文献

藤井省三『エロシエンコの都市物語——一九二〇年代東京・上海・北京』みすず書房(版切れ)

藤井省三『魯迅と日本文学——
漱石・鷗外から清張・春樹まで』
(東京大学出版会)

藤井省三『魯迅——東アジアを
生きる文学』岩波新書

エロシエンコの都市物語

1920年代 東京・上海・北京

藤井 省三

